

令嬢娼婦と仮面貴族

ロイド・サリヴァン

メリルリスの父親で
子爵の爵位をもつ。
愛情深いが、
娘のことには少し鈍感。

イアナ

メリルリスの従姉。
常に男性に称賛されることを好む。
アレステイスと結婚後、
不慮の事故で命を落とす。

クロエ

メリルリスの姉の乳母の娘。
しっかり者で
メリルリスの相談相手。

ルシンダ・サリヴァン

メリルリスの母親で
よき理解者。
子供の小さな変化を
見過さない
鋭い観察眼をもつ。

ルードヴィヒ・サリヴァン

メリルリスの兄。
幼い頃は妹をからかうことも多かったが、
実は深く愛している。

アーチー

ギレンギース家の執事。
小さい頃からアレステイスを
可愛がり、面倒をみている。

アレステイス・ギレンギース

メリルリスの兄の学友。
侯爵家の次男で
頭が良く、胸も立つ。
5年にわたる魔物討伐を終え、
重傷を負って帰還する。

メリルリス・サリヴァン

自分の容姿に昔から
コンプレックスを抱える子爵令嬢。
幼馴染のアレステイスを長年の間
一途に思い続けてきた。
普段はおとなしく、のんびりしているが
いざとなると
思い切った行動を取る一面も。

プロローグ

夜でも錠戸よらひどがきつちりと閉められた明かりのない部屋に、私は蝋燭ろうそく一本の燭台しよたいを掲げて入った。

暗闇に目が慣れるまで扉の側に立ち尽くし、ようやくぼんやりと部屋の中にある家具の輪郭が浮かんでくる。

「こちらへ来い」

部屋の中央から低い男の声が聞こえて振り向くと、寝台に腰掛けている人物の影が見えた。燭台しよたいで足を照らしながらそちらへ歩いて行く。

「そこで止まれ」

再び男が言い、びたりと立ち止まる。

「そこに燭台しよたいを置け」

男が顔を向けた方向に小さな丸テーブルが見え、指示通り、手に持っていた燭台しよたいを置いた。

「名は？」

「……クロエ」

名を告げるとしばらく沈黙が流れた。

「こちらへ来て、着ているものをすべて脱げ」

がっしりとした男のシルエツトが見えた。男は腕を私に向けて差しだし手招きする。

蠟燭の心許ない灯りは、男の濃く長い髪が肩に無造作にかかり、白い部屋着の合わせがはだけている様子をぼんやりと照らし出す。そこからいくつもの傷が見える。異質なのは男の風貌。顔の上半分が覆面に覆われ、高い鼻梁と意思の強そうな口元だけが見えた。

一瞬息を吸い込みたじろいだのを男は敏感に察した。

「クロエ、どうした？ 何を怖じ気づく。そのために来たのだろうか」

男の声からは苛立ちが窺える。

「わかっているわ……せつかちなお客さんね」

少し低音のかすれぎみの声で答える。思ったほど震えていなくてほっとした。

「無駄な会話や前戯を期待するなら他を当たれ。お前は貰った金に見合うことだけしていれば
いい」

冷たい言葉が浴びせられる。優しく迎えられるとは思っていなかったが、心が挫けそうになる。

「それとも私の風貌が恐ろしいか？」

少し弱々しい声音になる。威勢よく振る舞っているが、拒絶されることを恐れている感じた。

彼の背中の方こうにある寝台に目をやる。

「話は……聞いていました」

「金はすでに支払った。相場より遥かに多いはずだ。払った分はきちんと約束を果たしてもら

おう」

「わかっています。精一杯ご奉仕させていただきます」

私は意を決して着ていた衣服から下着まですべてを脱いだ。

首の辺りで一つに結んでいた茶色の髪も解く。

ふわりとねこっ毛の柔らかい髪が肩を滑り、胸を覆うように垂れた。

戸惑いながらも、目の前の寝台に腰掛けてこちらを見つめる覆面の男を見返した。

彼の瞳に私の体はどう見えているのだろうか。

二十歳になり、少しは女性としての魅力が備わっているだろうか。

ありがたいことに、腰まわりは昔より細くなったが、胸の方は豊かなままだ。

多くの男性が、女性のその部分の大きさと柔らかさに価値を置いていることは知っている。

この人も、この体を見て少しは喜んでくれているだろうか。

彼は、受け入れてくれるだろうか。

ここで躊躇ってはこれまでの苦勞が水の泡だ。ここへたどり着くために色々なことをしてきた。

もう、後には引けない。

私は今、かつて憧れ、思慕した男の目の前にいて、娼婦として抱かれようとしている。

「もっと近くへ」

ほとんど真つ暗闇に近い部屋を裸になって男の方へ歩く。差し出した男の手に体が軽く当たると、その両手が迷わず真つ直ぐに豊かな胸を掴んだ。

「あ……」

「ふふ、噂どおりになかなか豊かだ」

男が私の胸に触れ、その感触に興奮しているのが伝わってきた。

自分の体であつてもここまではっきりと触れたことはない。

節が硬くなった指が柔らかい乳房に食い込む。

両手で乳房を力強く揉まれ、引きちぎられそうだと思っていると、男の手が胸を離れて背中に戻り、自分に引き寄せる。その瞬間、男の湿り気を帯びた口が片側の乳房に吸い付いてきた。

「あん……」

熱くざらついた男の舌が乳輪の周りを舐め回し、舌尖が中心の蓄つぼみを突いて押し潰す。

「んん……あん」

ベロベロと何周も乳首の周りを舌が這いずり回り、もう片方も同じように舐め回されると、ぞく

ぞくとした快感が背中を走り抜けた。

「ひゃっ！ ああ……」

舐め回されているうちに乳首がびんと立ち上がってきて、そこに歯があてられると、またもや悲鳴に似た声が漏れた。

こんな感覚は初めてだった。

自分の体なのに制御できない。こんな快感は知らない。

どこをどうすれば反応するのか、自分でさえ知らなかった体の反応を男の手と舌が引き出す。

みんなこんなことをしているのか。誰がやってもこうなるのか。

このままどこへ導かれていくのだろう。

まるで海図も持たず、羅針盤もないまま、暗い海に船出するようだ。

頼れるのは舵を取る彼の手腕のみ。この人だからこそ、すべてを信じて身を委ねることができる。本当の意味での初めてをこの人の腕の中で迎えるという喜びを感じ、私は今、未知の領域へ踏み出そうとしている。

「ほんの短時間弄もよほっただけでもう立ったのか。こっちはどうだ？」

すつと男の手が胸からお腹、お臍へその脇を通り、足の付け根に伸び、その間にある秘部にあてられた。

腰が引けそうになるのを何とか堪えた。

初めてなら、そんな場所に触られることに戸惑いや恐れを抱くものだ。

でも、娼婦ならそこに触れられることを躊躇してはられない。

「ああん……はあ」

「毛を剃っているのか……さすがだな」

男のごつごつとした指が割れ目に沿って進み、第一関節で指を曲げると、膣口にあてられた。くちゅり、と小さく水音がする。

指の感触と耳から聞こえる卑猥な音が、私の感覚を麻痺させていく。

「もう濡れている」

文句のようだが、暗闇で響く声に苛立ちは含まれていない。

一体これはどこから湧いてくるのだろう。初めてのことばかりで、男が与える快感を拾うだけで精いっぱいだ。

これくらいで翻弄されているようでは、相手に不審に思われてしまう。

「あああ……」

「思ったより狭いな……経験が少ないのか……まさか初めてではないだろう」

指を差し入れた先が意外に狭くて指一本がやっとの状態に、男がいぶかしむ。

不安が的中し、私の拙い反応と一度も男性の陰茎を受け入れたことがないその狭さに、男から疑問が出た。

「ちが……処女……違うか、あああ」

否定しようとして言葉にならず、身もだえる。

三本目の指が入り、ぐるぐると中を掻き回されると、時々気持ちいいところが擦れて嬌声が勝手に出てくる。

三本の指が出たり入ったりを繰り返すと、ますます水音が大きくなってくる。

「ああん……そんなに激しくしちゃ……んんんっ」

ずぼすぼと下の指が抜き差しされ、両胸も何度も交互に舐めて吸われる。親指で花芽を軽く押されるとぶると体が震えた。

「なんだ。もう軽くいったのか……商売女にしては早いな」

「……お客さんが……上手……」

舌先でべろりと勃起した乳首を舐めて男が言うので、経験がないことを誤魔化すためにそう答える。これがイくというものなのか。頭の奥が痺れてうまく考えがまとまらない。

疑問を抱かせてはいけないのに、うまい言葉が見つからない。

「まあいい……」

男が商売女を選ぶ条件として提示したのは、口が堅くて彼のどんな要求にも拒まず応えること。健康なこと。そして彼の風貌に怯まないこと。

「そろそろ、いいな」

男が指を引き抜き、自分の穿いていた部屋着の下を下ろすと、反り立った彼のものが飛び出した。蠟燭だけの灯りの中、想像以上に大きい男の卑猥なそれを目にして、腰が引けそうになる。

腰を持って浮かせると、寝台の上に寝かされて足を大きく広げられた。

「久し振りだから、手加減できないぞ」

乱暴そうに言う。本当に乱暴なことをするなら黙ってすればいいのに、わざわざ断りを入れるところに彼の育ちの良さが窺える。

濡れた膣口に先端が当てられるだけでびくりとなる。男は先端で敏感なところを軽く擦ってから、一気に突き刺した。

肌があたり、根元まで男のものを受け入れたとわかった。

「くっ……きついな」

「んん……」

自分が狭いのか彼が大きいのか、それでも彼の形に合わせて道が開かれて、さらに押し入ってくる。

何という圧迫感。私の中いっぱい埋まった男の陰茎の熱さに、中が溶けそうだ。

他の人と比べることはできないが、明らかに男のそれは大きい。

「きついが……なかなか気持ちがいい。何人相手にしたか知らないが、名器だという売りは本当らしいな」

彼の声が耳に響く。

不審に思いながらも、私が娼婦であるという言葉はまだ信じてくれているようだ。

込み上げてくる涙を、私は必死で堪えた。

涙を見せては彼に怪しまれてしまう。

思いもしなかった彼との交わり。

欲しくてたまらなかった、彼との時間。

本当の自分のままでは与えられることのないもの。

男は分身が全部入りきると同時に腰を動かし出す。初めはゆっくりと抜き差しし、次第にスピードを速めていく。

「ああ……あん……はあ……イ、イク……」

ぎゅっとシーツを掴み、男の腰に絡めた脚に力が入る。溢れ出る液が摩擦で擦れて軽く泡立つ。

男が最奥まで突き上げた瞬間、絶頂が訪れ、びくびくと痙攣する。ぎゅうと絞り上げるように膣を締め付けると、熱いものが奥に流れ込むのがわかった。そのまま最後の一滴まで絞り出すように何度も締め付けた。

「ふう……」

男がずるりと自身を引き抜き、私を上から見下ろす。

目まで覆い尽くした仮面の下で、何を思っているのだろう。

「悪くなかった。この部屋は朝まで好きに使え。また明日、同じ時間に来なさい」

下ろしたズボンを上げて、男は部屋から出ていった。

今さっきの行為を思わせる残り香と、自分の中からどくどくと溢れる男の精が、たった今行ったことが夢でなかったと証明している。

そこには愛などひとかけらもない。ただ、性欲のはけ口として扱われただけ。

「アレステイス……」

すでにここにはいない、今さっき自分を腕に抱いた男の名を呼ぶ。

あの人に……かつて憧れたあの人に抱かれた。たとえば彼に出会った少女ではなく、娼婦としてのメリルリースだったとしても。

彼は仮面を被っていたが、ある意味では私も仮面を被っているようなものだ。

娼婦のクロエという偽りの身分で、彼の傍に来た。

かつての快活さはどこにもなく、どこかよそよそしい彼の態度。彼が変わったのは、死と隣り合わせの過酷な戦いとそこで負った後遺症。そして愛する者の死。

体を拭いて脱いだ服を着直す。そして言われたとおり、その部屋で一夜を明かした。

娼婦に扮したのは自分だが、本当にことを済ませたら彼はさつさと立ち去ってしまった。体は綺麗になったが、その中心はまだ彼を受け入れた感触が残っている。初めて受け入れた男の性器の生々しさに驚愕する。やはり本の中や人から聞いて得た知識より、経験が一番勉強になる。

ほんの少し前まで自分は処女だった。ここに娼婦として来るため、疑われないように性具を使って処女喪失した。その他のことは人から教わった。

名器だと彼は言ったが、彼がそう思ってくれたなら、嘘で塗りかためたこの状況で、唯一本当のことがあったことになる。

「あ、そうだ」

思い出して着ていたドレスのポケットからごそごそと小さな布袋を取り出した。

中から出てきたのは避妊と性病予防のための丸薬で、事後一時間以内に吞むように言われていた。長年の研究成果により、ようやく五十年ほど前に完成したこの薬は抜群の効果を発揮する。特に副作用はないが、吞むものすごい睡魔に襲われる。

男が避妊する方法もあるが、彼はしていなかった。するかしないかは客に選ぶ権利がある。

暗くてよく見えなかったし、彼は全裸にはならなかったのでわからなかったが、体にはいくつもの傷があった。大きな魔獣の爪痕が胸の中心に斜めに走っていた。最後まで外さなかった仮面も、彼が負った怪我のせいだとわかっている、少しも不自然に思わなかった。

彼を最後に見たのは今から五年前。当時私は十五歳。彼は二十一歳だった。その五年の歳月が私たちの姿を変化させた。

快活で潑刺^{はつらつ}としていた彼は消え失せ、代わりに現れたのは冷徹で人を寄せ付けない空気を漂わせた孤独な人物だった。

「私もずいぶん変わってしまったものね」

ばれないように細工したせいでもあるが、彼が今の私を見て、私が誰か気付くことはないだろう。思春期の私は今より背も低く肉付きも良かった。彼が魔獣討伐隊の一員になり、大々的な壮行式で見送ったのはつい昨日のことのようでもあり、遙か昔のことのようにも思える。

討伐隊の一員として出征することが決まり、彼は私の従姉^{いとこ}のイアナと挙式を挙げた。華やかで誰が見ても美しいイアナは多くの男性たちから信奉を集めていたが、彼もその一人だと知って私の初

恋は終わった。

金色の巻き毛にアイスブルーの瞳。誰もが彼女を美の女神と崇め、彼女もそんな男性たちからの賛辞を喜んで受け入れていた。

アレステイスは当時から同年代の若者たちの中でも際立って優秀で、黒髪に濃い緑の瞳の美しい顔立ちが女性に人気があった。

兄の友人でなければ、私は彼に見向きもされなかっただろう。

互いに美男女で侯爵家次男のアレステイスと伯爵家長女のイアナの結婚は、家格的にも釣り合いの取れた理想の結婚だと言われた。

イアナと彼の結婚式では、親戚だからという理由で無理やり花嫁付添人にされた。すらりとしたイアナの友人と姉たちに交じり、くすんだ茶色い髪とハシバミ色の瞳といった華やかな色味を持たない私は浮きまわっていた。

それでも慣例で花嫁は花婿付添人と、花婿は花嫁付添人と踊らなければならなかった。花嫁と踊る前に、嫌そうに私と踊る花婿付添人の表情に私は傷付き、それがイアナの私に対する嫌がらせだとわかっていたのでなおさら辛かった。

一方花婿のアレステイスは私と踊る時に嫌な顔一つせず、すつかり落ち込んでいた私に「今日はありがとう。君も素敵な旦那さまがみつかるといいね」と言った。

私はあなたの花嫁になりました。心の中でそう叫んだ。

彼の目には私が妹にしか見えていないのはわかっている。兄しかいない彼は私の兄、ルードヴィ

ヒの学友で、学校が休みになるとよく私の家に遊びに来ていた。

イアナと従姉妹とはいえ、大して裕福でもない子爵家の末っ子で、見目もよろしくない私にどんな縁談が舞い込むのかわからなかったが、多分アレステイスとイアナのような恋愛結婚はできないだろう。

背も高く立派な貴公子のアレステイスに、私は初めて紹介された時から心を奪われていた。決して手の届かない、光に恋慕する虫のように彼に惹かれた。

彼がイアナとの短い蜜月を終えて出征するのを物陰から見送ったのをよく覚えている。

堂々と妻として日向で彼を見送るイアナが羨ましかった。彼に抱き締められて大衆の面前で彼からのキスを受けるイアナ。私は心の中で彼にどんな状態でもいい、生きて帰ってきて、と祈った。

私の祈り……呪いかもしれない思いが通じ、彼らは見事魔獣の大氾濫を平定し帰還した。

多くの戦士の命が失われ、彼の上官たちもたくさん亡くなった一方で、彼は数々の功績を上げ、帰還する時には將軍にまで登り詰めていた。

しかし最後の戦いで、彼は魔獣の牙と爪でかなりの痛手を負い、魔獣の吐く毒の吐息により目に一生残る後遺症を受けた。

聞くところによると、彼の目は僅かな光を受けても激痛が走り、暗闇でしか身に着けた仮面を取ることができないらしい。

満身創痍で帰還した彼を、愛する妻イアナが出迎えることはなかった。彼女は彼が出征した後、事故で命を落としたのだ。彼が帰還する直前のことで、前線にいる彼にそのことは伝わっていない

かった。

そして彼は將軍の職を辞し、領地の邸に引きこもってしまった。

扉を叩く音で目が覚めて、一瞬自分がどこにいるのかわからなかった。

罫戸よじどが閉められた部屋は変わらず暗く、今が朝なのか夜なのかさえもわからない。

いつの間にか眠りにつき、彼のことを夢見ていたようだ。

私が返事をする、夕べ私をこの部屋まで案内してくれた年かさのメイドと執事の男性が入ってきた。

メイドはトレイを提げており、そこにはパンと湯気が立ったスープが載っていた。

「裏口に馬車を用意しています。食べ終わったら帰りなさい。若様はあなたをお気に召したようです。また今夜同じ時間に馬車を寄越します」

彼がまた今晩も自分を呼んでくれたことに喜ぶ。夕べ、ここを出ていく際に言っていたことは本当だったようだ。

メイドはトレイを側のテーブルに置くとさっと立ち去る。

「メリルリース様……本当にこれでよろしいのですか」

彼女が出ていき、執事と二人になると彼の口調が変わった。彼は低姿勢になって声をかけてきた。

「アーチー……」

彼はここでクロエこと私、メリルリース・サリヴァンの素性を知る唯一の人物だった。アーチー

と私の実家に仕える執事のドリスが昔馴染みで、今回私がここに来ることになったのも、彼がアレステイスのことについてドリスに相談を持ちかけたのが発端だった。

「もう後戻りはできないわ。このまま彼が私に飽きるまで見守っていて。あなたに共犯のようなことをさせてごめんなさい」

「私は別に……若様が私ども以外に興味を持たれるなら……しかし、お嬢様がそこまで犠牲を払う必要はないではありませんか。あれほど美しいお声だったのに」

「それは、そうね。私の唯一誇れるところだったもの」

すべてにおいてイアナに劣っていた……でも、イアナだけでなく他のどの令嬢にも負けない唯一の私の美点が、歌声だった。教会の聖歌隊でソロを任せられ、式典でもてはやされていた私の歌声。

それゆえに素性がばれてしまうその声を私は薬品で潰した。喉を焼き尽くすような痛みにと晩苦しみ、今の掠れた声になった。

「お嬢様の美德はそれだけではありません。心根のお優しさと聡明さ、他のどの令嬢にもひけをとりません」

「ありがとう。でもそれは、多くの男性が恋愛相手に求めるものではないわ」

知識を得ても小賢しいと言われ、優しさも夜会では披露することができない。反対に、イアナは私を持つていないものをすべて持っていた。

「それに、私はもう祝福の歌を歌う気持ちにはなれない。大勢の幸せより、たった一人の人を幸せにできればそれでいいの」

「お嬢様……それではお嬢様の幸せはどこにあるのですか」

「あの人が立ち直ってくれたら、それが私の幸せ……」

彼がもう一度貴族社会に戻ったら、私はもう必要なくなる。その時には潔く彼の前から消えて、どこか修道院に入るつもりだった。しかしそのことはまだ誰にも言っていない。周りから引き留められるだけだとわかっているから。

「ところで彼の目は治るのよね？」

「はい。今、帝国の魔導師と治療術士が総出で、討伐した魔獣の遺体から毒素の中和剤を精製しているところだと。毒素さえ中和できればあとは治療術で、完全とは言えないまでも快復する可能性はあると伺っています」

「それを聞いて安心したわ」

「ただ、開発にはまだ少しかかるそうです」

そのことは彼には伝えられていない。薬はまだ完成していないし、視力もどこまで戻るか不透明な状況で期待させられないからだ。私はそれまでの間、彼に少しでも寄り添うつもりだった。

「アーチーがドリスに相談してくれていなければ、私はこうして彼に近づくこともできなかった。どんな形でも、彼が明日も生きていようと思ってくれたら、それでいいの」

アーチーがくりとその場に膝を折り、額を床に擦り付けた。

「アーチー！ どうしたの？」

「お嬢様……お嬢様がここに通う間、私ができることは何でもいたします。どうか若様のこと、よ

ろしくお願いいたします」

「やだ、アーチーやめて、私がやりたくてやっていることだから……あなたは彼に気付かれないよう、協力してくれればいいのよ」

「では、せめて生活の面倒はお任せください。必要な物は何でもおっしゃってください」

「住むところを手配してくれただけで十分です。お願いですから私に頭を下げるようなことはしないでください。あの、そろそろ帰ります。ク・ロ・エが心配していると思いますので」

懇願するとアーチーは渋々ながら立ち上がった。

それから私は彼が手配した馬車に乗り、今までいたギレンギース侯爵邸から村の外れにある家へと帰った。

★ ☆ ★

私、アレステイス・ギレンギースが眠りから覚めた時、すでに魔獣討伐は終焉を迎えていた。

討伐の連合軍はランギルスの森の深淵にまで突き進み、魔獣が生まれる源を破壊するまであと少しというところまで来ていた。

長く続く討伐の遠征で、多くの仲間が傷つき倒れ、命を失った。

当初、討伐隊の一個中隊の隊長だった自分が將軍にまで昇進したのは、功績を上げたこともあるが、上にいた者が次々と倒れ、知らぬ間にその地位まで押し上げられていたからだ。

我が国の総大将であるビッテルバーク辺境伯も、後方に身を置いて報告を待つことが多かったが、その時は最終局面に差し掛かっているという確信の元に、ともに最前線に進軍していた。

その時、それは起こった。

ガビラという蛇型の魔物を部隊が追い詰めた。追い詰められたガビラは最後の力を振り絞り、辺境伯に襲い掛かった。それを庇おうとして前に出た自分に、ガビラの爪と吐息が襲った。

爪が身を切り裂き、吐息が目には浴びせられた。

自分は死ぬのだと思い、覚悟を決めた。

意識が戻った時には、それから二か月が経っていた。

討伐は、自分が負傷して意識を失っているうちに終了し、部隊はすでに解散したらしい。

討伐隊が駐屯していた村から最も近い都市、フラフェリアの軍専用病院の病室で、そのことを聞いた。

目はガーゼと包帯でぐるぐる巻きにされて何も見えない。

腹部の傷は大きな痕が残ったものの、すでに塞がっていた。

そして、医師から突き付けられた言葉。

完全な失明は免れたものの、ガビラの吐息に含まれた毒により神経が傷つき、僅かな光でも過剰な反応をされると言われた。

医師は自分が動揺し、騒ぎ立てるのではと覚悟していたようだが、不思議と心は凜いでいた。

目の前で多くの仲間が命を失ったのを見てきた。

中には四肢が千切れたり、上半身や下半身を失ったりした遺体もあった。

それを見てきたためか、多少の不便や制限があっても自分は生きているのだと、取り乱しはしなかった。

「辺境伯閣下は無事か？」

自分の体の状態について説明を受けた後、医師に訊ねた。

「はい。何度もこちらに足を運ばれ、容体をお聞きになっておられました。討伐の後処理のために今は首都に戻られておりますが、お目覚めになられたらすぐにお知らせするよう、申しついております」

それを聞いて安心した。

目覚めて一週間後、病院へ両親と兄が面会にやってきた。

無事とは言えないが、生きている息子を見て号泣していた。

「イアナは？」

当然来ているはずの妻がいらないことに疑問を抱き、訊ねた。

派手好きで、常に異性からの称賛を糧としているような女性だった。自分以外の者に心を砕くような慈愛に溢れた聖女とはとても言い難いが、夫の窮地に何を置いても駆けつけるくらいの優しさはあると思っていた。

「イアナは……イアナはね」

言い淀む母の声が震えている。父も兄も言葉に窮している。

それで何かが彼女の身に起こったのだと察した。

「どこか具合でも悪いのですか？」

目を包帯で覆われているため、家族の表情を見ることはできないが、明らかに動揺している様子に、ただ事でない雰囲気を感じ取る。

「正直に言ってください。気休めの言葉や嘘は聞きたくありません」

傷を負い、視覚に障害を持った時から、腫れ物に触るような周りからの空気に嫌気がさしていた。毅然とした言い方に、両親は重い口を開いた。

「事故…」

しかもそれは自分が傷を負う少し前のことで、彼女の訃報は、自分がここに運び込まれるのと同じくらいに届けられたようだ。

「亡くなる前、彼女は私とのことについて何か、言っておりませんでしたか？」

少し前、彼女に送った手紙のことを思い出す。

討伐もそろそろ終わり、何とか生きて帰れそうだとわかった時、夫婦の今後について自分の考えを書いて送った。

思えばあれが彼女に送った最後の手紙だった。

そうと分かっていたなら、もう少し言葉を選んで書いたものを。

自分勝手な言い分だったと思いつながら、死別ということで夫婦生活に突然終止符が打たれた。

「いえ、特に何も…：彼女はずっと実家において、我が家にはほとんど近寄りませんでしたし…：」

「そうですか…：事故」

ほぼ新婚生活もないまま、討伐に出征した自分との結婚は、彼女にとってどのようなものだったのだろう。

彼女に対して、自分は優しい言葉の一つもかけたことがあっただろうか。

死を覚悟して出征した討伐隊遠征。跡継ぎでない貴族の子弟にとつて、参加は義務のようなものだ。

仲間たちが、同じく討伐に参加する何人かとともに華々しく壮行会を開いてくれた。

その日はなぜか酒の回りが早く、それほどの量を呑んでもいないのに泥酔してしまった。

目が覚めると、同じ寝台に裸のイアナが横たわっていた。

第二章 闇に浮かぶ灯火

馬車が家の前に着くと同時に玄関の扉が開いた。

「お帰りが遅いから心配していたんですよ」

「ごめんなさい……アーチャーと話をしていたから」

中からクロエが飛び出してきて、馬車から降りた私に抱きついた。

馬車は私を降ろすと、すぐに来た道に戻っていった。

「さあ、お疲れでしょう、体を拭いて差し上げますからね。それからゆっくりお休みください」

クロエは私を労るように背中を押し、二人で家に入った。

彼に名前を訊かれ、咄嗟に彼女の名前を告げた。クロエは姉の乳母だったタリサの娘で、私が四歳になるまで我が家にいた。私にとってはもう一人の姉のような人だった。アレステイスが我が家に入りするようになった頃にはタリサは亡くなっていた。父親とともに彼女は我が家からいなくなっていたので、彼は知らないはずだ。

アーチャーが用意してくれた小さな二階建ての家は入るとすぐに台所兼食堂があり、奥にひと部屋がある。その部屋をクロエが使っていて、私は二階にある一室を使っていた。

「さあ、服を脱いで待っていてください」

彼女は私より七歳年上で、すでに未亡人だ。彼女の夫も魔獣討伐の一員として出征し、そして昨年亡くなった。二人の間には子どももいなかったため、彼女は夫の死後、再び私の実家、サリヴァン子爵家に戻ってきていた。

クロエとアーチャー、そしてドリスの三人が私の協力者だった。

服を脱いで待っていると、クロエがお湯の入った桶を持って戻ってきた。

何も言わず彼女は首から肩、背中、胸からお腹と拭いてくれる。胸には彼が吸い上げた痕が点々と付いている。

「あ、そこは……」

彼女が足の間に手を伸ばすと思わずびくりとなった。

「痛みますか？」

「少し……」

「後でお薬を塗りますね」

男慣れしている風を装うため、痛みを堪えて彼を受け入れたけれど、男性との性交が初めての私に、彼のものはあまりに大きかった。

私が今回のことを考えついた時、ドリスもアーチャーも反対した。でも、クロエだけは反対せず、協力してくれた。

夫を魔獣討伐で亡くした彼女は、大切な人を失う辛さを知っている。

アレステイスは運良く生きて帰ってきたが、いつまたどうなるかわからない。それならば後悔し

ないように、というのが彼女の考えだった。

もちろん、その先の私の人生にいい未来はないだろう。純潔が必ずしも花嫁の条件とは言えない平民と違い、貴族の令嬢は夫が初めてでなければならぬ。もともと結婚後はその部分も緩くなり、互いの配偶者以外の相手と体の関係を持つ人も少なくない。

「あのね、彼……アレステイスは一度も笑わなかったの」

記憶にある彼の笑顔はお日さまのように私の心を照らした。今の彼は凍てついた氷のようだった。長きにわたって命のやり取りをしてきて、最後に大きな後遺症を伴う大怪我を負った。そして戻ってきたら妻は事故で亡くなっていた。彼が世を儚み、引きこもった気持ちもわかる。

彼をもう一度笑顔にする力が自分にあるとは思っていない。だが肉欲があるならば、生への執着が芽生え、また前向きに考えてくれるのではないか。

いつでも彼の捨てゴマになる覚悟はできている。

「それで……乱暴なことでもされましたか？」

「ううん……酷いことは何も……彼の弱味につけこんだようでも申し訳ないけど、一生ないと思つて諦めていたことだから」

「お嬢様はそれでいいのですか？ 後悔しないようにとは言いましたが、一生思いを伝えないつもりですか？」

「……彼はまず自分を取り戻すことが最優先。私のことは後でいいわ。偉そうなことを言つても、必ず彼を昔の彼に戻す自信もないし、方法もわからない。これが正しいのか、確証もないわ」

「お嬢様……」

体を拭き終わり、木綿でできた寝間着をすっぽりと頭から着せてから、クロエは私を抱き締めた。「何があつてもクロエは味方です。お嬢様が胸に秘めているあの方への思慕も、罪の意識も、全部わかっています。あの方に抱かれて、どうでしたか？ やはりお辛いですか？ もしお辛いなら、今から辞めても……」

「いいえ！ 辞めない」

思わず反論していた。クロエが仕方ないなと笑うのを見て、ひっかかったと思った。

「その……嫌……ではなかったわ。暗くてほとんど彼の顔も姿も見えなかったけど……邸にこもつて半年なのに、まだ体には筋肉があつて……傷だらけだったけど、私の体に触れて彼が興奮して……好きな人に抱かれるってあんな気持ちになるのね」

開き直つて思つたままを口にした。クロエに取り繕つても仕方がない。まだ彼の力強い腕と熱が体に残っている。もし夕べ一度だけで終わるなら、それでいいと思つていた。

でも一度では満足できない気持ちに自分でも驚いている。彼も同じ気持ちなのか、また今晚も来いと言つてくれた。

次こそは最後かもしれないが……

「お腹は空いていらつしゃいますか？ 何かご用意しましょうか？」

「大丈夫。アーチーが軽食を出してくれたから」

「ですが、夕べも何も召し上がらなかつたでしょう？」
討伐から傷だらけで帰ってきて、私とは顔を合わせる間もなく、アレステイスは領地へと引きこもった。

それから半年。初めて今の状態のアレステイスに会うことになった昨夜は、緊張して何も喉が通らなかつた。

正確に言えば、彼の所へ行くことと決意してから、緊張の連続でまともに食べていない。お陰で少し痩せることができた。

クロエにはそれ以上痩せる必要はないと言われたが、腰回りが細くなった。

それでもアレステイスと結婚式を挙げた時のイアナの腰回りにはまだ遠く及ばない。

「では、いつでもお腹が空いたら食べられるように、何かお作りしておきますね」

「ありがとう、クロエ」

お礼を言うとお腹は黙って何でもないと首を振った。

「お疲れでしょう、時間になったら起こして差し上げますから、お休みになってください」
そう言ってお腹の鏡戸を閉めて、クロエは部屋を出ていった。

鏡戸の隙間から微かに零れる日の光に、埃がきらきらと舞うのをぼんやりと眺める。

体は疲れているはずなのに、頭は冴えてすっきりしている。

昨夜のことは実は自分の願望で、まだ夢を見ているのでないだろうか。

初めて会った時、彼は十歳だった。少年らしさの中にすでに大人の雰囲気を感じ出して、同じ年の兄が幼く見えたほどだ。

それから年を追うごとに背も伸び、声も変わり、少年の面影は消え、社交界デビューの頃にはすっかり青年へと変わっていった。

そんな彼の変化に気付いたのは私だけではない。

彼と年の近い令嬢たちはすっかりアレステイスに夢中になった。

年二回の長期休暇には必ず兄とともに我が家に顔を出してくれてはいたが、そのうちデートで忙しくなっていくた。

それでも、会えばいつも優しい笑顔を向けてくれた。

——魔獣討伐隊が編成されるらしい。

ランギルスの森近くに領地を持つビツテルバーク辺境伯からそんな便りが届いたのは、彼が二十一歳。私が十五歳の頃。

サリヴァン子爵家を継ぐルドヴィヒと兄さまと違い、ギレンギース侯爵家の次男であるアレステイスは、貴族令息の務めとして討伐隊に徴兵された。

そして私にとっては最大の悪夢、イアナとアレステイスの婚約が発表された。

討伐にアレステイスが赴くということだけでも衝撃だったのに、まさに青天の霹靂。
花婿として祭壇に立つアレステイスは、胸が締め付けられるほどに素敵だった。

でも彼は私の花婿ではない。

それがどんなに悲しく苦しかったか。最後まで涙を見せることなくのり切った自分を褒めてやりたい。

夕べ私を抱いたアレステイスは、これまで私が知っているどの彼とも違っていった。欲望をたぎらせた雄の彼を初めて知った。

いったい何人の女性があ腕に抱かれたのか。

包み込む大きな手。広く厚い胸板。温かく滑らかな肌には、触れただけで無数の傷があるとわかった。

誰にも触れさせたことのない秘所を彼の熱い陰茎が貫き、敏感な部分を擦った時の体中を突き抜ける快感は忘れない。

肌を合わせ、深い部分で繋がったからこそわかる。

彼の心には今でも誰かが住んでいる。

それが誰なのか、聞かなくてもわかる。

「心が遠いわ、アレステイス」

どんなに深く繋がっても、彼の心の奥にはたどり着けない。

私はうつすらと涙を浮かべながら、いつしか眠りにについていた。

夕べと同じ部屋に通されると、昨日と同じように彼は待っていた。

言われる前に彼に近づき、手に持った燭台しよくたいを置いて服と下着を脱いだ。

「昨日と違って手際がいい」

「頭は悪くないの。それに時間を無駄にしたくないもの」

「賢明だな。私も無駄は嫌いだ。そういう賢さは嫌いだはない」

「ありがとう。生意気だと思われなくてよかったわ」

彼が私の言動に好感を抱いてくれて嬉しく思えた。

すべて脱ぎ終えると蝨燭ろうそくを吹き消した。

「なぜ消す？ それではそちらは何も見えないだろう」

「私はそうですがあなたは違うでしょう。その仮面を外せば見えると聞いています」

「執事に聞いたか」

「ご主人様の目のことだもの、大事なこと。蝨燭ろうそくの僅わずかな灯りでも目に入ると大変だって……」

「そうだ……」

「だから灯りを消したの。私は見えなくても、あなたが見えているなら何も問題はないわ」

手を伸ばすと彼の体に当たった。そのまま間合いを詰めてもっと近づく。

ふっと彼が息を吐く音が聞こえ笑ったのがわかった。

「驚くな……もし腰が引けても逃げられないぞ」

「逃げるのは性に合わないの」

彼が立ち上がるのがわかった。怒った？ 生意気な口をききすぎただろうか。

しかし布が擦れる音がして彼が服を脱いでいるのがわかった。夕べは服を着たままだったが、今

夜は彼も裸になつてくれるみたいだ。惜しむらくは私には何も見えないこと。

闇闇の中、じつと息を詰めて聞こえる物音と動く空気と彼がしていることを想像する。

やがて闇夜に二つの灯りが灯った。

空中に浮かんだその灯りが彼の目だと気付く。

彼がようやく仮面を外した。

あの愛情深かった深緑の瞳でなく、闇夜の猫の目のように彼の目が光っている。

「私の目について、どこまで知っている？」

瞳が私の頭から爪先まで眺め回しているのがわかる。私からは見えないが、彼にはよく見えているみたいだ。

「魔獣討伐で怪我を負ったと……」

「そうだ。ガビラの吐息を浴びた。そのせいで目の神経がやられ、僅かな光にも過敏に反応する。

お陰で昼間は仮面が離せないが、夜目は利くようになった」

ガビラがどんな魔獣なのか見たことがない私に、姿は蛇に似ていると教えてくれた。その体液は毒そのもので、全身が硬い鱗で覆われているそうだ。

「今は？」

「くつきり見える。大きな胸も細い腰も、すらりと伸びた手足も……」

彼が手を伸ばし、腰に手を当てて寝台の上に私を横たえる。

「足を開け」

言われたとおり、膝裏を持って膝を胸まで持ち上げる。

彼の手が太ももの内側から中心に向かって滑っていく。そのまま中心の花弁を割り広げる。

暗闇で彼の目が光り、自分でも見たことのない部分をじっくりと見られていると思うと、それだけでじんわりと奥から勝手に愛液が滲み出て来た。

「見られるだけで感じているのか」

滲み出た液を彼が指で掬い、粘りを広げるように全体に塗りつけ、花芽をつまみ上げた。

「あ……ん」

腰が浮いて声が漏れる。ぐりぐりと指で擦ったり弾いたり、とんとん叩いたりと色々な刺激を加えられ、私はびくびくとその度に腰を揺らした。

「ひっ……あ……いや……」

ずぶりと膣口に指が入れられ、長い指が花芽の裏側部分を刺激すると、またもや腰が跳ねて一瞬でイってしまった。

「あ……はあ……あん……」

その後も彼は指をさらに増やしぬちゅつ、ぬちゅつと何度も出し入れを繰り返す。指先が縦横無尽に中で動き回り、膣壁を突き回された。

「気持ちいいか？」

「は……ああ……はあ……き、気持ち……いい……おかしくな……る」

アレステイスが自分でさえ触れたことのない場所に触れている。心を寄せている相手に自分のす

べてをさらけ出し、彼が与える刺激に翻弄されていく。

彼が誰を思い何を考えているかわからないが、この瞬間、この上なく親密な時間を共有している事実がさらに私の快感を呼び起こしている。

愛液がお尻の方まで流れ、シーツを濡らしていく。汲めども汲めども涸れない泉のように後からどんどん溢れてくる。誰にでもこうなるのかわからないが、クロエに男女の睦事について教えてもらったとおりのことが、自分の体に起こっている。それがこんなに刺激的で気持ちのいいものだとは思わなかった。

「イっ……イっっちゃうっ……あひ……あ……ん……」

彼が体を動かして顔を覗き込む。夜行性の獣のようなギラギラした目が視界に入り、彼の指先が気持ちよくなる箇所^{ポイント}に当たるように自分から腰を動かす。

「あ、あ……ああん」

乳房に熱い口が吸い付き、舌が乳首を押し潰した。ざらつく舌が敏感な先端に触れる。

反対側の乳首はくにくくと指で捏ねくり回され、上と下両方からの刺激に絶頂が押し寄せてきた。びくびくと彼の指を引き込むように、中が痙攣^{けいれん}する。

差し込まれていた指が引き抜かれ、代わりに彼の屹立^{きりりつ}が擦り付けられた。

すぐに入れてもらえるとと思ったのに、彼は陰唇に擦り合わせるだけでなかなか入れてくれない。

「何が欲しい」

「いや……いじわる……しないで……ください……あなたの……早く……入れて」

自ら腰を持つていく。指では届かない奥に触れてほしい。

「これが欲しいのか？」

私の懇願に亀頭の部分が蜜口にめり込む。

「ああ……そう……それ……もっ……」

こくこくとうなずき、腰を浮かせ、自分から迎えに行く。

熱く硬い彼のものが膣壁を擦りながらわけ入ってくるだけで、絶頂に達した。

「く……相変わらず狭い……イくのはいいが、そんなに締め付けるな……」

そういう彼も中でまた少し大きくなったと感ずる。

ようやくすべてが入り、こつんと先端が奥を突く。

「ひゃあ……あ……いい……気持ち……いい」

あまりの気持ちよさに無意識に彼を締め付ける。

彼の光る目が細められ、彼も我慢しているのがわかる。

ぐいっと片足が持ち上げられ、膝を彼の肩に乗せられると、さらに彼が奥を突いてきた。

「ひあ……ら、らめ……そんな……奥……」

体勢を変えられて中に入ったままぐりぐりと彼のものが回転すると、また違う部分が擦れてびくびくとなった。

「ここか？　ここはどうだ？」

少しずつ当たる場所を変えながら私の反応を確認していく。

「あん……ひゃあ……いい……ああ……」

色々な所を突かれ、その上花芽^{かが}までぐりぐりと指で弄^じられる。

それからゆっくりと彼は律動を繰り返す。彼には私の様子が見えているので、抜いたり突いたりしながら、さつき私を感じた場所を的確に強く刺激してくる。

私には自分に触れる彼の感触と息づかい、そして闇にギラギラと光る彼の目しかわからない。彼のために灯りを消したのは自分だけれど、様子がわからないだけに余計に興奮する。

アレステイス……アレステイスが私の側にいて、今この瞬間、親密な時を過ごしている。初めて彼に会った四歳の時。彼は私の初恋の人になった。華やかな姉と優秀な兄に比べて、太ちよで食べることや読書しか興味のなかった私に、彼はとても親切だった。こんな妹が欲しかったとも言ってくれた。幼い頃はそれでも嬉しかった。こんな私でも彼の特別になれるのだ。

年を経るにつれ、妹としてでなく異性として意識してほしいと思い始めた頃、色々な女性との噂が聞こえてきた。

彼と噂になるのは美人と評判の人ばかり。交際相手の女性たちと自分の明確な違いに愕然^{がくぜん}とする。なぜ私は兄のように黄褐色の腫でないのか、なぜ姉のように目の覚める赤毛ではないのか。二人の特徴的な色味を暗く地味にしたのが私の目と髪だった。加えて運動が苦手な私は、いつまでもぼちやりとしていた。

そんな私をイアナはいつも意地悪くからかった。私たちの母と彼女の母が姉妹だったが、向こうは伯爵、こちらは子爵。彼女は蝶よ花よと育てられ、いつも人の輪の中心にいた。彼女が明るいき

なら、私はその光に照らされた影だった。アレステイスは他の男の子たちと違う。そう思っていたのに、二人が婚約したと聞いてショックで寝込んでしまった。二人の結婚式など出たくはなかった。

なのに、イアナから姉と二人で花嫁付添人を頼まれた。姉はそうではなかったが、イアナは私が彼を好きなことに気付いているようだった。イアナの家でイアナも含めて付添人の衣裳合わせをしている時、二人の婚姻の事実を知って驚いた。

爵位を継がないアレステイスが魔獣討伐に行くことになり、仲間内で激励会を行い、酔い潰れた彼をイアナが寝台に押し込み、既成事実を作った。それから妊娠の可能性を告げ、彼女は彼の妻という立場を勝ち取ったというのだ。

彼女が欲しかったのは人妻という地位。アレステイスは夫としても申し分なく、そしてすぐ魔獣討伐でいなくなる。人妻という立場は彼女を簡単には手に入れることのできない女のように思わせ、それだけで男たちが群がってくるようになる。彼女はそれを狙っていた。

「そんな……ひどい。だまして彼と結婚するの？」

それは不誠実ではないかと言う私に、イアナが答えた。

「もちろん、アレステイスのことは好きよ。でも特別じゃないわ。彼が私に与えてくれる価値が欲しかったの。この先、一人の人に縛られるなんて、考えただけでぞっとするわ。私は自由に恋愛を

楽しみたいの」

彼女が語る真実に吐き気がし、そんなイアナを憎んだ。

「あなたのような人にはわからないでしょうね」

イアナが私に言った。

それはどういう意味なのか、私は訊ねなかった。

私とイアナは違う。そんなことはわかっている。アレステイスが選んだのは彼女で、私ではない。それが一番私の心を傷つけた。

ぐつときつく胸を掴まれ、はつとする。

「何を考えている。余裕だな、私の相手をしながら他の……好きな男のことでも考えているのか」
痛いくらいに乳房を掴まれ、思わず顔を歪めたのを見て彼がぱつと手を離れた。

暗くて表情はわからないが、その声には怒りが混じり、目には剣呑な色が浮かんでいた。

「違います……」

あなたのことを思っていました。その言葉を呑み込み、腕を伸ばして彼の顔に触れる。

「やめろ」

びくりとして彼が顔を逸らす。体の一番中で繋がっているのに顔に触れるのを拒まれ、胸が痛んだ。今の行為は親密過ぎたかもしれない。愛し合う者同士なら当然の触れ合いだが、金で雇った女にはそれは許されないことなのだろう。

「旦那様こそ……今までその腕に抱いてきた女性の誰かを思っているのではないですか？」

自分で言っておきながら傷ついた。その中に私はいない。私に触れながら、頭ではイアナを思い浮かべているのかも思うとますます辛くなる。

「……そんなことはない」

軽く否定したが、一瞬の間があった。いくら金で買った女でも「そうだ」と言うのは悪いと思っただのかもしれない。

その代わり、肩にかけた足を下ろされ、ぐるりと俯せにされた。顔も見たくないということなのか。

膝を突き、後ろから胸を掴まれ繋がったまま体を起こされると、また違うところに当たり、さらに奥まで突き上げられた。

「ああ……奥まで……はあ」

やわやわと胸を揉まれ乳首を弄られ、深く楔を穿たれ声を張り上げる。私が膝を折って座る彼の太ももにお尻を下ろすと、アレステイスに背後から抱き込まれた。

「他に……客を取っているのか」

あまりの快感に最初何を訊かれたのかわからず、遅れて理解して首を振る。

「あ、あなた……だけです」

後にも先にも彼しかない。この関係が終わったらすべてを捨てて一生を神に捧げる覚悟をしている。

「そうか……」

なぜそんなことを訊くのか訊ねようとした瞬間、背後から首筋に唇が当てられ、じゅつと音を立てて吸い上げられた。

まるで自分のものだといわんばかりに、キスマークが付けられた。その行為に喜びを覚え、我知らず呑み込んだままの彼を締め付けた。

首筋から両肩、肩甲骨、背中の窪み。胸の先端を摘まみながら、次々と印が付けられていく。吸い上げられる度に後ろから突き上げられ、ぐんと奥まで先端が当たる。私も食い千切るように締め付ける。

片方の手が下りてきてぶくりと膨れ上がった芽を摘ままれると、快感が背中を突き抜け、繋がった部分からどくどくと愛液が噴き出した。

「はあ……はあ」

後ろにいるアレステイスに体を預け、脱力する。私はもう何度もイっているのに、彼は息こそ上がっているが、まだ硬く大きのまま私の中に納まっている。

腰を捻って後ろにいる彼を振り返る。これほど近くにいるなら暗くても顔が見える。

相変わらず整った顔つきだったが、五年の歳月と過酷な魔獣討伐が、彼の顔をさらに精悍な男に仕立て上げていた。高い鼻梁に薄い唇。光る瞳が彼自身を危険な獣へと変貌させていた。

兄の友人でもう一人の兄とも慕った優しい彼の片鱗は、そこにはなかった。

「恐ろしいか」

私にじっくり見つめられるのが耐えられないのか、視線を逸らそうとする。その彼の後頭部に腕を回し、ぐいと自分の方に引き寄せ、唇を重ねた。彼の目が見開かれた。

彼の口の方が大きいのですべてを塞ぐことはできないが、精一杯口を開き、唇を食む。

「……」

彼の口から吐息が漏れ、中にいる彼の肉棒が大きく脈打つ。私が舌を差し入れると、待っていたかのように彼の舌が襲い掛かって絡み付いてきた。

交互に舌をくねらせ口腔内でしごきを削るように舌を追いかけ捕らえ、引き込む。

唾液を混ぜ、互いに呑み込み合う間も、彼の手は私のぶくりと膨れ上がった乳首と愛芽を弄り続ける。彼を啞えたまま自分からぐいぐいと腰を左右に揺らし、気持ちいいところに当たるように動かしていく。

ぐちゃぐちゃという水音が下からも口からも聞こえ、頭の芯がぼーっとなってきて再び上りつめていく。

「あ、いや……抜けちゃう」

彼が私の腰に腕を回して一旦体を持ち上げた。彼のものがずると抜けるのを膣を引き締めて止めようとす。半分抜けた状態で私は反転し、仰向けに寝台に落とされた。

「わかっている。体勢を変えるだけだ」

彼が言ったとおり私に股がると一気に最奥を貫かれた。

「あ……心……いい……」

そこから彼がものすごい速さで律動を繰り返した。パンツパンツと音が響き、ズブズブと私から溢れる液が泡立つ。彼が突くたび子宮の入り口をぐんぐんと叩かれる。

「はあはあ……イ……イく……またイっちゃう」

突然、ものすごい波が押し寄せ、目の前に火花が散った。

「ああああ……!!」

たまらず声を上げ、ぎゅうつと彼のすべてを絞り出すかのように締め上げた。

体の奥に熱い彼の精が注がれる。彼が私の中で感じ、熱い吐息とともに官能的な呻きを漏らす。

一度精を放つても彼は衰えることを知らず、その夜は何度も彼の手でイカされ、三度目の大きな絶頂を迎えると、私は疲れ果てて意識を手放した。

★ ☆ ★

鎧戸よろいどを閉めた部屋で、ビュンビュンと空気を切り裂く音が響く。

灯り一つないその部屋で、アレステイスは上半身裸で何度も何度も剣を振るった。

何かを振り切るように一心不乱に剣を振るい、体中から噴き出た汗が上段から剣を振り下ろすたびに飛沫ひまつとなって辺りに飛び散る。

仮面を外し、ただ前方を鋭く見据え、黒髪が汗で顔の周りや首筋に張り付く。額から頬、顎に汗が伝っても彼は動きを止めない。

もう一時間以上も彼はそこで剣を振るっていた。

「もうそれくらいにしてはいかがですか」

剣先が触れない位置から、声をかけたのは古参の執事だった。

火照ほった体から汗が蒸気となって立ち昇り、部屋に熱気が満ち溢れる。

「彼女は？」

剣を立てかけ、タオルで顔や体の汗を拭いて首に掛け、近くに置いた水差しから水を飲む。

「先ほど馬車で送りました」

暗闇の中、その場から動かない執事の方を振り返る。

「賭けはお前の勝ちだな、アーチャー」

負けたのに彼は少しも悔しそうではない。暗くて顔は見えないが、声の様子からそれがわかった。

「お前の人脈には驚いた。どこから見つけてきた」

その問いに執事は言葉を濁した。

「恐れ入ります。あらゆる伝手つてを使いましたので、はつきりとは……」

彼女はあくまで主人のために彼が見つけてきた娼婦であって、それ以外の誰でもない。

「そうか……まあいい」

アレステイスはそれ以上追及しなかった。

「そういえば、勝った時の褒美を決めていなかったな。何でも言ってくれ。何が欲しい？」

「褒美など……若様がお気に召されたのなら、それだけで私は満足です」

「無欲だな」

その答えも予想はできていた。

「彼女は……本当に……娼婦なのか？」

少し考えた後、アレステイスがぼそりと疑問を口にした。

「……どうして……そうお思いに？」

「何となく……語れるほどそういった部類の女性を知っているわけではない。だが、夕べの彼女は想像していたより……ずっと初心だった。もちろん、そういう演技ができる女性もいるだろうし、偏見は持っていないつもりだが……」

女性らしい丸みを帯びた体つき。白くきめ細かい傷一つない吸い付くような肌。

零れ落ちんばかりにたわわな二つの双丘。陰茎を突き刺した彼女の中は熱く蕩けるようだった。

思い出しただけで再び下腹部に熱が集まる。

自分さえ気付いていなかった、漠然と思い描いていた理想の姿がそこにあった。

この世にあれば自分も夢中にさせる女性がいたことに驚く。

自分がそうなのだから、きっと彼女がこれまで相手にしてきた男たちの中にも、そう思う者がいてもおかしくない。

彼女の体を通り過ぎていった、名も顔も知らない男たちに謂れのない嫉妬心が沸き上がる。

「生い立ちは存じ上げませんが……その……確かに彼女は……その道で探してまいりました。怪しいとお思いなら別の者を……」

「いや、余計なことを言った。忘れてくれ」

別の女性を手配すると言いかけたのを慌てて止めた。

幾日か抱けばいずれ飽きるかもしれない。これまでつきあってきた女性たちも、最初は好ましいと思っていた。

何度か会ううちに何かが違うと感じ、気持ち冷めていつて別れた。

時には罵られ、号泣され、頬を叩かれた。それでも一度冷めてしまうと、二度と心は動かなかった。

友人や、色恋に関係なく付き合う女性には変わらない気持ちで接することができるのに、こと、

恋愛となると長続きしない。

自分はどこかおかしいのではないか。

寄宿学校からの付き合いのルードヴィヒやその姉妹とは変わらず良好な関係を続けている。

メリルリス・サリヴァン……六つ下の、親友の妹。

最後に会ったのは自分の結婚式だった。

あの頃からいずれ美しい女性になる兆しはあった。きっと二十歳になった今は、姉に負けず劣らず美しくなっているだろう。

可憐で無垢で、一心に自分を兄のように慕ってくれた。いつまでも傍で見守りたいと思った。

「どこまで勝手なんだ」

「はい？ 何かおっしゃいましたか？」

立ち読みサンプル はここまで

距離があるため、自分が呟いた言葉が執事の耳には届かなかつたらしく、訊ね返された。

「独り言だ。気にしないでくれ。それより湯を沸かしてくれないか。風呂に入る」

「かしこまりました。支度が整いましたらお呼びいたします」

入浴の支度のために執事が出ていき、再び部屋に一人になると、アレステイスは部屋を見渡した。

図書室を模様替えして設えた部屋は、寝室以外で彼が仮面を外す場所の一つだった。

もともと窓が少ないその部屋の本棚を移動し、鍛錬のための道具や机や椅子など必要なものを運びこんだ。

怪我を負ったことは後悔していない。それで多くの仲間の命が救われた。命があるだけ自分は恵まれている。

だが、この先一生光を避け、闇とともに生きなければならぬのかと思うと、時折無性に叫びたくなる。

明るい太陽の下で二度と見ることでできないものを思い、ぎゅつと目をつぶって血が出るほど唇を噛み締める。

大事な人や物はすべて光の中に置いてきた。

彼女は、自分が背に向けた太陽の匂いがした。

ビッテルバーク辺境伯が見舞いに訪れてくれたのは、外的処置もすべて終え、退院の日を待つばかりの時だった。

腹部の傷はすでに塞がり、普通に活動できるようになっていたが、光を極限まで遮る仮面を被った姿を見て、彼は何度も何度もすまなかったと言った。

「詫びも礼もいりません。綺麗事に聞こえるかもしれませんが、あなたが無事でよかったです。助けた相手が、その後で怪我をしたり命を落としたりしたら、それこそ報われません」

「今後私ができることがあれば協力を惜しまない。遠慮なく何でも言ってほしい」

「では、私の將軍職を解き、軍から除隊させてください。元よりこのような状態になり、国のためにこの身を役立てることはできなくなりました。閣下からも陛下にお口添えください」

国王にはすでに辞職を申し出ていた。

このような身になったからには、將軍として国のために尽くすことはできないと。

国王からは、傷が癒えたら改めて首都に来て直接申し出よと返事が来て、退役は保留されている。「決断を急ぐな」

「申し訳ございません。閣下をお守りできたことは誇りであり、後悔はしておりません。命が助かっただけよかったですと思っております。ですが、かつてのように国に仕えることができないのに、いつまでも今の身分にすがりついていたくないのです。どうか、ご温情を」

ほとんど光を通さない仮面の奥から、必死で辺境伯に除隊を請うた。

魔獣討伐を終え世界は救われた。次に魔獣が氾濫するまで、世代的には二つも三つも隔てることになる。

討伐に失敗したならばランギルスの森から魔獣が溢れだし、多くの命が失われたことだろう。